

重の井



子別川

信

七月の人形拵瑠璃

四の格
交楽座



七月の形浄瑠璃

— 演出總形人・線味三・夫太 —

(夜の部)

彦山権現 誓助劔
戀女房染分 手綱
伊勢音頭 戀寢刃

毛谷村六助住家の段
道中双六の段
重の井子別れの段
古市油屋の段
奥庭の段

(晝の部)

鎌倉三代記
伊賀越道 中双六
京鹿子娘道成寺

米洗ひの段
三浦之助別れの段
佐々木高綱物語の段
平沼津里の段
内川の段

★十三日より晝夜の狂言入替上演致します★

昭和十九年七月一日初日

初日 晝十二時・夜四時 二部
毎日 晝十二時・夜五時 開演

● 一部料金 ●

一等席 五圓

二等席 二圓四十錢

三等席 八十一錢

(各等入場稅共)

一等御座席は五日前より
一等椅子席は五日前より

前賣切符發賣致し居ります

前賣切符專用電話

南 ④ 四七一 一番

一般御用の電話

南 ⑤ 三〇三 二番
三七八 八番



13

米洗ひの段

三浦之助別れの段

佐々木高綱物語の段

竹鶴本 叶太夫
竹澤本 叶太夫
鶴八友 十太夫
竹友平

竹本 伊達太夫
野澤喜左衛門

切竹本 織太夫
鶴澤清二郎

★晝の部 (十三日より夜の部)

鎌倉三代記

米洗ひの段
三浦之助別れの段
佐々木高綱物語の段

享保三年正月(二三七八)豊竹座上演の紀海音作の同名のものがあるが本曲とは別のものである。

本曲は、天明元年三月廿七日(二四四一)より江戸肥前座に上演された全十段よりなる作者不詳のもので題材は、大阪夏の陣を素材にして世界を鎌倉にさり、三浦之助は木村重成、時姫は千姫、佐々木高綱は眞田幸村、北條時致は徳川家康で、坂本城を大阪城に假託したもの。

尚、こゝに注意すべきは作意上よりみて「近江源氏先陣館」(明和六年十二月—二四二九)再興の竹本座上演の近松半二他の作)に次いで同じく竹本座に明和七年五月廿二日より上演され、その筋から上演禁止を命ぜられた(六月十六日限り中止、爲めに正本出です)作者不詳、(近松半二も)の「近江源氏太平頭黎飾」全九段で、これが恐らく改修され、江戸で復活上演されたのがこの「鎌倉三代記」

人形役割

三浦之助母閑居の段

三浦之助母	吉田小兵吉
時姫	桐竹龜松
女房 おらち	桐竹紋司
富田六郎	吉田玉徳
阿波の局	吉田常次
讃岐の局	吉田龜夫
女房 おくる	桐竹政龜
三浦之助吉村	吉田榮三郎
藤三	吉田玉助
實は佐々木高綱	

であります。そしてこの江戸での初演後間もなく同年六月には大阪堀江市の側の芝居でもこの「鎌三」は上演され、同八月には「花飾三代記」を題して讀本淨瑠璃として刊行もされた。

梗概

坂本城の頼家公と鎌倉の北條時政公と不和となり、遂に戦端が開かれた。

三浦之助義村は幼時より母に別れて坂本城に奉公してゐたが、母が大病と聞いて戰場から痛手をおさへて絹川村の閑居を見舞に駆けつけた。母の看病をする時姫は時政の娘で、三浦之助の許嫁である。母は我子の未練を喜ばなかつたが、時姫は夫が歸つたので飛び立つ計り、然し三浦之助にとつては敵方の大将の娘とて、夫に立てる操があれば父時政の首を討てと命ずる。

時姫は之より先父時政からも三浦之助と縁を切り其の證據に母を殺して戻れと命ぜられてゐる。夫につくか、親の味方か、恩と戀との二途に立ち今は絶對絶命の板挟みとなつたが、遂に思ひ切つて、北條



時政打つて見せようと返事して遙かに父に詫びた。
先に阿波の局と讃岐の局とは時政の命によつて時
姫を連れ戻らうとして居る。富田六郎も忍んでゐる。
坂本方の佐々木高綱は安達藤三郎に面相が似てゐる
爲、變名して鎌倉方の内幕に潜み、表面は鎌倉方と
見せかけてゐた。

始終の様子を立聞いた藤三郎の女房おくるが、行
かけるのを三浦之助が捕へる。おくるに促されて六
郎が井筒へ駆け寄つたが、下から突出された槍に命
を落す。井筒よりは藤三郎實は佐々木四郎高綱稟々
しい姿で現はれ、石山の陣でおくるの夫藤三郎と身
を換へ、藤三郎は高綱の身替りに討たれた終始を物
語り、時姫を促して時政の陣所へ歸らうとする。

小手調らべに突出した時姫の槍に老母は貫かれ
て、父への土産は出来た。この姑への返禮を忘れる
など激動する。

あとに心をひかれ乍ら、佐々木高綱に勵まされて
三浦之助は勇んで戦場へ馳せ向ふ……。



伊賀越道中双六

沼津里の段
平作内の段

沼津里の段

竹本住太夫

鶴澤重造

野鶴澤友松

平作内の段

竹本大隅太夫

鶴澤清八

胡弓 鶴澤寛弘

梗概

天明三年（二四四三）四月竹本座初演。作者は近松半二、近松加作。忠臣蔵、曾我兄弟と共に日本三大敵討の一つ、荒木又右衛門の伊賀越の敵討を骨子としたもので近松東南作「伊賀越乗掛合羽」（安永六年三月—二四三七—豊竹此吉座上演）の改作で、全曲は第一鶴が岡の段、第二行家屋敷の段、第三圓覺寺の段、第四郡山官居の段、第五郡山屋敷の段、第六沼津の段、第七關所の段、第八岡崎の段、第九伏見の段、第十敵討の段の十段からなつてゐる。この中第五、第八と共に、この第六沼津の段が知られてゐる。

鎌倉の商人吳服屋重兵衛は旅で、沼津の近くまで来たが、荷持の安兵衛を有事で元との道へ歸した。此驛の平作といふ爺に荷物を持たしたが年取つてゐるので思ふにまかせぬ内、石につまづき生爪を刺し

人形役割

沼津里の段

吳服屋	重兵衛	吉田光	造
荷持	安兵衛	吉田兵	次
親	平作	吉田玉	助
娘	およね	桐竹紋十	郎
池添孫八		桐竹紋	昇

た。重兵衛は所持の薬をつけて勞つて遣る所へ娘お米が來た。委細をきいて重兵衛を我家へ迎へた。平作の家は貧しいくらしであつた。重兵衛は今夜は此家に泊ることになつた。夜ふけた頃お米は印籠を盗む。目さめた重兵衛は仔細を問ふと、其身は以前江戸吉原の遊女瀬川の果てとわかり、夫渡邊志津馬が不慮の怪我を救ひたいばかりに最前父の傷が即座に治つた妙薬であるから盗んだと涙ながらに詫び入る。平作は盗みをするとは何事だ。幼ない時に養子に遣つたたつた一人の兄にも濟まぬと嘆き悲しむ。重兵衛はその兄と云ふのは何者たと聞く。それは鎌倉八幡宮の氏子で幼名は平三郎、母の名は「とよ」と書いた守袋をつけてあると平作は語る。重兵衛はひしと胸に應へたがわざと名乗らず、次ぎの下りまでに石碑を建てよくれとて金子を渡して行く。

その跡には印籠と臍の緒書きが残つてゐた。

平作は我子と知り、お米は澤井股五郎が持つた印



籠と知つて驚く。千本松原へ追ひ付いた平作は股五郎の行衛を重兵衛に尋ねるが、重兵衛は股五郎に恩を受けた義理を思ふて容易に打明けない。平作は遂に腹を切つて、死んで行く身に聞かしてくれと頼む。義理と恩愛の斷末魔に迫つた重兵衛は鍔蔭に忍んだ、お米と池添孫八に聞かすやう「股五郎の落つく先は九州相良、吉田で逢ふたと人の噂」と云ふ。平作と重兵衛は相抱いて親子の名乗り、死に行く名残りに泣き入る。雨は一しきり降りつゞいて平作は落入る。



京鹿子娘道成寺



鶴鶴豊豊野鶴野豊豊豊豊竹竹竹竹豊竹竹
 澤澤澤澤澤澤澤竹竹竹本本本本本本本
 友叶猿仙八友吉廣松司富津雛源呂相重
 太二 衛五 島太 磨太 太太 生太
 平郎郎松造門郎助夫夫夫夫夫夫夫夫夫

京鹿子娘道成寺

(床本) 京鹿子娘道成寺

月は程なく入汐の煙り満くる小松原いそぐすれど戀風の
 ぶり袖重く吹たまり、あちな娘と人毎に笑はゞ笑へ百々千
 鳥、急ぐ心かまだ暮ぬ日高の寺にぞ着にける、へ嬉しやさ
 らば舞んさて、あれにまします宮人の烏帽子を暫しかりに
 着てすでに拍子すゝめけれ。

花の外には松ばかり、花の外には松ばかり、暮れそめて鐘
 や響くらん、鐘に恨はかずかすござる、初夜の鐘を撞くこ
 きは諸行無常と響くなり、後夜の鐘を撞くときは是生滅法
 と響くなり、晨鐘のひびきは生滅、入相は寂滅爲樂とひび
 くなり、聞いておどろく人もなし、われも五障の雲暗れて
 眞如の月を眺めあかさん、言はず語らぬ我がこころ、亂れ
 し髪の亂るもつれないは唯移り氣な何うでも男は悪しよ
 者、みやこ育ちははすはなものぢやえ、戀のわけ里士も

人形役割

白拍子	花子	桐竹紋十郎
才念坊	吉田玉市	
珍念坊	桐竹龜松	
雲念坊	吉田光造	
好念坊	吉田玉徳	

道具をふせ編笠で、張さ意氣地のよし原、花の都は歌でやはらぐ、數島原につさめする身は何人さふし見の墨染、煩惱菩提の撞木町よりなには四筋に通ひ木辻にかむろだちから室の早咲、それがほんに色ぢや一い二う三い四う夜露の日しもの關路も共に此の身を馴染重ねて仲はまる山たゞ圓かれと思ひそめたがえんぢやえ、梅ささんく櫻は何れ兄やら弟やらわきて言れぬな花のいろへあやめかきつばたは何れ姉やら妹やらわきて言れぬな花のいろへ、西もひがしもみんな見に来た花の顔さよえ、見ればこひぞ増すえさよえ、かはゆらしさの花むすめこひの手習つひ見ならひて何人に見しよさて紅鐵漿つきよぞ、みんな主への心中だておく嬉し、おく嬉し、末はかうぢやにな、さうなるまではこんさ言はずにすまそそえさ、誓紙さへいつぱりか嘘かまこそか何うもならぬほご逢ひに来た、うつかり悋氣せまいぞさたしなんでみて、なさげなや、女には何がなる殿御殿御の氣が知れぬ氣がしれぬ、悪性なく、氣が知れぬうらみうらみてかこち泣露を含みさくら花、さばらば落ちん風



情なり、おもしろの四季の眺めや、三國一の富士のやま、
 雪かこ見れば花の吹雪か、吉野やま散り来る、散り来るあ
 らしやま朝日山やまを見渡せば歌の中やま石山のいなり、
 さる程にさるほどに、さるほどに寺々の鐘月落ち、鷄鳴い
 て霜雪天にみち潮、程なく此の山寺の江村の漁火、愁に對
 して人々眠れば好き隙ぞこ立舞ふ様にれらひ寄つて撞かん
 させしが思へば此の鐘恨めしやこて龍頭に手をかけ飛ぶよ
 さ見えしがひきかづいてぞ失せにける。

☆疎開を實行しませう

疎開も手近な

御奉公

毛谷



毛谷村六助住家の段

中	竹	野	竹	豊	鶴
本	本	澤	本	澤	澤
濱	吉	友	相	呂	友
太	三	衛	生	太	衛
夫	郎	門	太	夫	門
			夫	郎	

★夜の部 (十三日より晝の部)

彦山権現誓助劍

毛谷村六助住家の段

天明六年閏十月十八日(二四四三)より初めて大阪道頓堀東の芝居に上演された。作者は梅野下風、近松保藏の合作。全十一段よりなり、殊に第五一味齋屋敷、第六お菊返り討、第七瓢箪棚と共にこの第九毛谷村六助住家が最も名高い。

梗概

長州藩の武藝師範吉岡一味齋は微塵流の達人京極内匠の爲に闇討にあつて殺され、それが不覺とあつて家は改易、一家は敵を尋ねて行方定めぬ旅にさまよふ身となつた。

吉岡にはお園、お雪と呼ぶ二人の娘があつて、お園は豊前毛谷村の六助と許婚、お雪は他に嫁して彌

人形役割割

毛谷村六助住家の段

彈實は	京極内匠	正	桐竹紋	昇
門弟	軍八		吉田多三郎	
同	平次		吉田萬次郎	
毛谷村六助			吉田玉助	
柚藤吉			吉田常次	
柚京助			吉田藤一	
一子彌三松			桐竹小紋	
後室お幸			桐竹政龜	
娘お園			桐竹龜松	
斧右衛門			吉田玉徳	
非人			大ぜい	

三松と云ふ子が有ります。そのうち姉妹は敵にめぐり會ひましたが、お雪は返討になり、お園も亦彌三松と別れ／＼になつて了ひました。

一方京極内匠は其後微塵彈正と變名して小倉の城下に來ましたが、八重垣流の達人毛谷村六助と試合して勝つた者は、五百石を以て召抱へるとの高札を眼にして、仕官の望みある彈正は、六助の孝心と俠氣につけ入り、親孝行の爲と偽つて、秘に勝を譲つて呉れるやう頼んだのです。六助は、親孝行の爲とあればと、小倉の家中の立會ひの下に勝を彈正に譲つてやりましたが、彈正は却て六助の未熟を嘲つた上、其額に扇で傷までつけて歸るのでした。

此處に吉岡の後室お幸は、はる／＼旅を續けて六助の家に一夜の宿を求め、六助の骨柄を見こんで親子になつて呉れと頼みますが、藪から棒とて六助はただ／＼あつけにとられるばかりで、兎も角もと、お幸を一間の内へと案内するのです。そして其身

は鳴く鶯に亡母を偲びつつ、看動に餘念もない折歸つて來たのは孤兒の彌三松です。

彌三松は母には死別し、伯母お園ともはぐれた後、情深い六助に拾はれて、まるで我子のやうにいつくしみ育てられてゐるのです。六助は玩具を出して彌三松を遊ばせるうち、いつしか彌三松は寢入つて了ひますが、其所へ訪れたのは虚無僧姿のお園です。

お園はかうした姿で諸國を巡り歩き。敵の行方をもとめてゐたのですが、今しも此家の門口を通りかかり、見覺へのある彌三松の着物の干してあるのが眼についたのでした。

然も此家の主こそ、未だ見ぬ夫六助であつたのです。

お園は最初彌三松の着物を見た時、つきり是は、いつぞや我家來を手にかけて、路銀はもとより、妹の遺兒まで奪ひとつた山賊の住居と思ひこみ、家來

の敵と六助に斬つてかかるのでしたが、仔細を聞いて始めて我が夫と云ふ事が分り、夢かと喜ぶのでした。ト此時奥からお幸も現はれ、亡父に代つて改めて二人に祝言させるのでしたが、折柄柚仲間が、斧右衛門の母が殺されたと死骸を昇ぎこんで來て、六助にどうか敵を討つてやつて呉れと頼みます。死骸を見ればこはいかに、それは彈正が孝行の種に使つた老婆です。

始めて六助も彈正の奸計にかかつた事を知りますが、又お幸、お園に聞いた恩師吉岡一味齋の敵の様子も、如何にも彈正のそれと符節を合はせますので、此處に彈正こそ京極内匠に紛れなしと云ふことが分るのでした。

六助は再び試合を願出で、美事彈正をうち負かした上、仇討御免の訴狀を出さうと、小倉の城へ急ぐことになる。

戀女房染分手綱

道中双六の段
重の井子別れの段



解題

本曲は寶曆元年二月（二四一一）大阪竹本座上演。作者は吉田冠子、三好松洛の合作。全篇は、東山の段、涼月の段、與作勘當の段、重の井訴訟の段、道成寺の段、孝行の段（香掛村）、恩愛の段、道行、親里の段、道中双六、重の井子別れの段、旅籠屋の段、歸參の段、敵討の段の全十三段からなり、この中、重の井子別れの段は、その第十段目に當るので、俗に「戀十」と云はれ、また「三吉戀の段」さも呼ばれてゐて、淨瑠璃に、又歌舞伎に度々上演され、人口に膾炙された一段である。

この「戀女房染分手綱」の原作は寶永五年（二三六八）大阪竹本座上演の、大近松作「待宵小室節」（後「丹波與

道中双六の段

重の井子別れの段

竹本 七五三太夫

豊竹 宮太夫

鶴澤 綱造

野澤 松之輔

豊澤 新三郎

豊竹 古靱太夫

鶴澤 清六

人形役割

重の井子別れの段

乳母	重の井	吉田文五郎
調	姫	桐竹小紋
こし元	お福	桐竹紋太郎
踊り	子	吉田兵次
同		吉田龜夫
本田彌三左衛門		吉田小兵吉
馬方	三吉	桐竹紋司
宰	領	吉田常次
宰	領	吉田駒三郎

作」(改題)で、これを改作し場敷を多くし、筋を複雑にし、舞台上の技巧を豊富にし、お家物式に仕立直したものである。

因みに吉田冠子とは、人形遣ひの非常な名手初代吉田文三郎の作者名で、新作淨瑠璃の趣向人形や舞台の工夫など彼の獨創から數多のものが生れ、現在の人形芝居の基礎は彼により作られてそのまゝ今日まで傳來してゐる。(義經千本櫻)の源九郎狐の人形衣裳に源氏車の模様を付けて今でもその衣裳のまゝを踏襲してゐるのもこの文三郎である。(謂はゞ、人形三人遣ひの大成者とも、且つ人形芝居の基礎を築上げた人とも云へ、現在の人形遣ひが姓とする「吉田」の流祖でもある。斯の道の歴史の上に重要な位置を占める人である。

梗概

丹波の城主由留木家の息女調姫は、關東の高家入間へ養子嫁子として江戸へ下る約束が出来た。入間家からは奥家老本田彌三左衛門が迎へに來て用意萬

戀女房子別荘段

此処槽下
曲直竹古靴大夫
相勤申候



早

端整ひ、いざ出立と云ふことになつた。

所が未だ年齢は僅か十歳になつたばかりの姫君は、この東下りが嫌だと俄に云ひ出してむづかるので、お乳人重の井はじめ腰元たちは、手をつくして慰めたけれど、どうしても御機嫌が直らないので一同困りはてしまつた。

そこへ、丁度姫君と同じ年頃の馬子の三吉と云ふものが、東海道道中双六とやらを弄んで居ると云ふことが聞えるので呼び寄せて姫君の御機嫌をとらせやうと云ふことになつた。

三吉は御前近くの縁先へ来て、望まれるまゝに道中双六の繪解きを、ことば面白く囃したて、東國の珍しい物語をしますのですつかり姫君のお氣に入り、直ぐにも東へ下ると云ふことになつた。

さて、かうして頭はない姫君が東へ下ると御意あつたのは何と云つても、馬方三吉の手柄であるお乳

人重の井は、その褒美にと御前から下され物の菓子や、なにがしの錢を三吉に與へた。

すると突然、三吉は「由留木殿のお乳人重の井さまとはお前か、そんならおれが母様」となつかし氣に抱き附かうとするのだ。重の井は、この小さな馬方がわが子とは、まさかと驚くのだつたが、しかし、胸に覺えないことではないのだつた。

話は十年のむかしに溯らなければならぬ。

この由留木家の家老伊達與三兵衛の倅に與作と云ふものがあつた。重の井は能師竹村定之進の娘で、腰元として御殿奉公をして居る中、與作と何時か離れがたない仲になり、その間に與之助と云ふ男の子さへもうけたのであつた。

この不義のことが顯れ、悪者の讒言によつて與作は故國を追放され、馬方にまで零落してしまつた。

重の井は父親の定之進の申譯の切腹により、與作と別れ、その後再び歸參して、姫君のお乳人となつた

のだ。

今此處に馬方三吉から、母様とすがりつかれ、その身の上を聞かされ、證據の守り袋まで見せられてみると、三吉はまさに我が子の與之助に疑ひはなかつた。

三吉は現在父親の與作とも別れ、幼ない身で近江の石部に馬方奉公をして居るのだ。その望みと云ふのは、父親を尋ね出し、親子三人水入らずで一日でも暮したいと云ふのだつた。これを聞いた重の井は胸もくだけるばかり、現左我が子に馬追ひをさせ、おのれはお乳入よと衣裳を着飾つて居る心苦しき、しかし今の場合母子と名乗つては、姫君のお名にも障ること、たゞ氣も亂れてむせび泣くのであつた。

見るからに賢し氣な三吉に、人違ひと偽つても無駄なことは知れて居た。譯をよく話せば、と今までの物語を三吉に詳しく聞かせ、心を鬼にして今では母でも子でもないもの、とそのまま別れやうと

するのだつた。三吉も聞き分けて立ち上つたが、その見すばらしい後影に又こみ上げて來る悲しさは、世が世ならば千三百石の世取りのこの子、雨風雪降りの夜道に馬追ふ姿も偲ばれ、我が身を役げ伏して奉公の身の淺ましさを打敷いたのであつた。

時に奥口から、姫君の御立ちが知らされ、乗物も昇ぎ寄せられた。

そして三吉が姫君のお伽にと、泣く泣く唄ふ、「坂は照るく」の馬子唄に、涙を嚙んではかない親子の別れをしたのであつた。





伊勢音頭戀寝又

古市油屋の段
奥庭の段

古市油屋の段
奥庭の段

竹鶴本南
澤本澤部
仙雛源寛
太太治
糸夫夫郎

人形役割割

古市油屋の段

女仲徳藍福料小女置仲泊女
郎居島屋玉理人
お岩万お
喜太
次野紺
大次郎
助鹿郎
居番郎
女居番郎
客女居番郎
吉吉吉吉吉
田田田田田
玉多藤萬兵龜紋政榮玉小光榮
三 次 兵 三
米郎一郎次夫司龜三德吉造郎

福岡貢は漸くの事でお家の寶刀青井下阪は手に入れたが、今一つ大事な折紙の詮議に身を打込み馴染みの油屋の抱へ女おこんにも頼んで日夜奔走してゐた。

貢の伯母は一日おこんを尋ね、貢を兼ねて許婚の間柄である榊と添はさねば養子親への義理が立たぬ故、如何か貢の事を思ひ切つて呉れと無理な願ひをするのだつた。

おこんは胸が張りさける許り悲しかつた。それに頼まれてゐる折紙の詮議——さう云へばこの間から泊つてゐる徳島岩次が如何うも怪しい。嫌ではあるが此身を一旦許るし、折紙を取りかへしてから潔く自害して未來の契りを固め様と決心し、その旨を書

梗概



き残すのであつた。

折柄女中の萬野がおこんを呼びに来た。そして貢とは手を切つて奥の客徳島岩次になびくが身の爲めとしきりにすゝめた。既に覺悟を決めてゐるおこんは、涙かくして萬野のすゝめに従ふのだつた。

其の頃、福岡貢は油屋の店先きに姿を見せた。心にかゝるのはおこんの事、またおこんに頼んだ大事な折紙の詮議のこと。——丁度出會ひ額に料理人の喜助が出て來た。喜助は貢だと知ると、四邊を見廻して斯う云つた。——私の親はもと貴方の親御の家來筋で、若旦那様の貴方に忠義を盡せと遺言して歿くなつた。其の大切な貴方様が、而も福岡様には許婚があり、御養子の御身分で、おこんと浮名を流すなどとは……と意見をすののだつた。

貢も意外な話に驚き、喜んだ。そしてその本心を打明けるのだつた。

斯うして何事かをしめし合した貢は、喜助の案内で油屋の暖簾をくゞつた。

しばらくして岩次がそつと出て下阪の刀の刀身を

スリ替へたが、窺つてゐた喜助がまたソツと元へ返へした。

岩次の連れの藍玉屋北六や萬野も一座して、おくんは心ならずも岩次と固めの盃を交はさうとしてゐる。

これを見た貢は、今は堪り兼ねて躍り出で、その盃を引つたくり、微塵に投げ付けた。然し不思議やおくんはそれをなじるのだつた。——女の變心。愛想つかし。その上、惡態の限りをつくす萬野。尙又身に覚えもないのにお鹿への無心の數々の状まで突きつけられて多勢の中で辱しめられた。

貢は一旦かつとしたが、大事を控へる身の無念を忍んで、喜助が差出す刀を受取り、雨と降る瀉言の中を夢中で歸へつて行つた。

後に岩次は、惚れた弱身から、とう／＼おこんに氣を許るし、下阪の折紙を渡したが、さつきすりかへた筈の下阪が、元の刀身に戻つてゐるので大騒ぎとなつた——。

と間もなく貢が途中から急いで引き返して來た。

取り違へた脇差の身が正眞の下阪とも知らない。其處へ萬野が慌てゝ出て來た。そして二人は言ひ争ふ中、鞘ぐるみ萬野の肩を打てば南無三、鞘は破れて血が流れ出た。萬野は救ひを求めた。今は絶對絶命、貢は萬野の肋骨をえぐつた。

血に狂つた貢。青江下阪はよく切れた。

斯うして貢は北六を、お鹿を、女中を、……續いて數人を斬り倒した。

おくんは驚いて走り寄つて來た。貢は恨の刃を振り上げた。おくんは刀の下をくゞつて貢に包みを投げ出した。それは苦心して探してゐる折紙ではないか。初めて眞實を知つた貢。然し後悔は遅かつた。

貢は今はと覺悟して刀の柄に手を掛けだ折、喜助が急ぎ戻つて來た。すりかへられたと思つた刀は喜助の機轉で眞の下阪ときかされた。今こそ青江下阪と折紙は手に入つた。

跡の事を喜助の俠氣にまかせた貢は、逃げ遅れた怨敵徳島岩次を一刀の下に斬り殺し、おくん喜助の情を感謝し乍らこの場を逃れて行つた。

文樂座小史 (昭和十九年三月調査)

○竹本座 創立(現今ヨリ二百五十九年以前) 真享元年二月(道頓堀西ノ芝居)

○文樂座 發祥(現今ヨリ約百五十年以前) 天明年間淡路ヨリ植村文樂軒大阪へ來ル

○第一次稻荷社内時代

文化八年ヨリ天保十三年ニ至ル

○西横堀新築地濱時代

天保十四年ヨリ安政三年ニ至ル

○第二次稻荷社内時代

安政三年ヨリ明治四年ニ至ル

○松島千代崎橋時代

明治五年ヨリ明治十七年ニ至ル

○御靈神社内時代

明治十七年ヨリ明治四十二年ニ至ル

○松竹合名社繼承

明治四十二年三月植村家ヨリ繼承

○御靈文樂座燒失

大正十五年十一月二十九日

○隨時興行時代

昭和元年ヨリ昭和四年マテ道頓堀辨天座ヲ始メ其他隨時興行

○四ツ橋文樂座創立

昭和四年十二月以來現在ニ至ル

開演毎に一方ならぬ御後援來觀を賜り厚く御禮申上ます

當文樂座は既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一体の形番瑠璃の日本唯一の公館也でございます

文樂座人形淨瑠璃は曾に大阪の誇りとする舞台藝術のみならず我日本に於ける古典舞台藝術の至寶として世界に誇るべきものであります

御毎にこの大使命が全う出来ますやう、皆様の御期待に背かぬ様、皆様に御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居りますが尙御氣付きの点は御客様の御聲として承りたく存じます

貴重品は 各自にお持ち下さいませ、お席席をお立ちの時は御携帶を願ひます

お煙草は 一階、二階廊下に喫煙台を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひを致します。お席では御遠慮下さいませ。

お食事は 西側、階下に大食堂と喫茶室が御座ります。

お化粧とお手洗 殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座ります。

場内に 寫眞撮影は絶對にお断り申上ます。

御休憩の間は 二階西側に大休憩所の設備が御座ります。御辨當御持參の御方は何卒御利用下さいませ。

出演者 病氣其他の事故にて出揃不能の場合は乍勝手代役にて相勤めますれば右様御了解を願ひます。

★お客様へ特にお願ひ申上ます
物資不足の折柄、洵に恐れ入りますがお下駄履きのお客様は晴雨に不拘なるべく上草履をお持參下さいませ、特にお願ひ申上ます。

尚、靴、草履のお客様はそのまゝ入場して頂きますので至極便利でございます

松竹株式會社 文樂座

支配人 大橋照夫

電話南75 三〇三二 三七八八 四七一八番

